

---

# 死神

空暗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神

### 【Zコード】

N3917D

### 【作者名】

空暗

### 【あらすじ】

死神、それは大罪を犯した者の行き着く場所

## 【外伝番】記憶と繋がり

「ヴィル、任務だつて」

後ろからの人びりした低い声で言われ、何だよと振り向く、もは誰だかは知っているが

すぐに白っぽい青色の髪が目に入り、やつぱりなと溜息をつく驚くほど整った顔立ちの男、簡単に言えばそんな感じだ少し青っぽい白い髪に真っ赤な目が二つ、まだ若干二十歳と思われるこの男は、この世界でもトップの実力を誇る実力者だ。

そして、俺の現在の師匠もある

こんな綺麗な見掛けして、中身はどうかと覗いてみれば真っ黒焦げだそれでもギヤー キヤーと黄色い声を上げられるのは流石にむかつくものがある

「何？誰から？」

師匠に対する態度とは思ひがたい態度での応対だがこの俺の質問に満足そうに微笑むだけで、注意もしない、この男はちつとも気にしてない、いや、気にならないらしい

「神様からだよ、任務内容は神殿に来てから伝えるだつて」  
なんだと神様だと？とうとう頭のネジ五本位抜けたのか…、そんな嘘で騙されるほど俺は鈍くないぜと言つ意味を込めてポンポンと肩をたたくと、男は悪魔のような微笑みを返す

「ほら、念願書だよ、早くいかないと神様怒るよ？」

チラチラと見せつけるのは正真正銘の念願書、ついでにもう受付済みギヤースこの馬鹿野郎悪魔、そう叫びたいが一応こいつも上司、言いたくてもいえねえ

「めっさ口に出しますよー、ヴィル君」

頭に手を置かれ、信じられない力で握られる

マジ死ぬマジ死ぬー何こいつ細身の癖して馬鹿力つて！！バタバタと暴れていると、いつの間にやら空を飛行中

「あ、手離してほしい？」

また来たよ悪魔スマイル、お願ひです離さないで下さい南無阿弥陀

亞南無阿弥陀

ポイと投げ入れられたのは綺麗な大理石の床が続く建物、神殿だ  
任務あるからじゃーねとさつと飛んでいく上司、俺を送ってくれ  
たんだ、優しいじゃんそう思つて少し感心していると、自分のズボ  
ンのポケットからはみ出している紙に気づくあー何だらう嫌な予感  
紙を広げてそこに書いてある字を読むと、こんなにやうううううううう  
つてと言つ感想しか出でこない

『お前が遅れたりすると俺の評価が下がるんだよ、これからは俺の  
弟子らしく気品のある言葉使いとかに気を付けいや、わざわざ優し  
く送つてやつたんだから感謝しどけ』

何この命令口調？まあ師匠だから当たり前だけ……

もうちよつと言い方つてもんがあんだろうよと愚痴愚痴言つて  
いると、使いのゴーレムが来る

「神がお待ちです、遅いですよ死神ナンバー168、ヴィル・ワイン  
溜息と一緒にでたような台詞、これだから此処の世界の住民は嫌い  
なんだよ、上からものがあるいやがつて

「へーい、了解しました」

態と行儀悪く接すると、そのゴーレムはやつぱり死神つて下級だね  
えと呴く、オイコラ殴つて戻こですか？

何もない大きな広場に通され、暫くすると声が聞こえた

まあ簡単に言つテレパシーみたいなもん、任務内容を聞かされた  
単純に言つと、これから俺の知人の過去を見てきてほしいらしい、  
んなもん自分で行けば良いのに……

「では、お願ひします」

はい、と短い返事をして、目を瞑る

体が地面に吸い込まれ、少しづつ分解されていく

そして大きな狭間に吸い込まれる

全てが吸い込まれ、目を開けると異世界が広がっていた

燐々と降り積もる灰色の雪と見知らぬ家々

その中の一つの大きな赤い家

そこに、見慣れた色合いの髪を持つ少年が居た

血だらけで、所々酷い怪我をしている、まだ新しいものらしく、ジワと服に滲んだ赤は鮮やかだ

「今日の報酬です、160万ドリル」

担いでいた大きな袋を門前に居た男に渡し、心配そうに返事をまつている

「ふーん、結構安かつたんだね……三日も掛かつて刈つた化け物なのに」

当たり前のように少年の金を受け取り、不満を言つ

160万と言う大金を安いと言つこの男は、ブクブクに太つていて  
ブタのようだ

それに比べ少年は痩せ細つていて、肉が殆どない

この男が少年のような生活をしたら、すぐに死んでしまうんだろうな

「…………すみません、今度はもつと大金を持ってきます」

怯えながら誤り、立ち去ろうとする少年を待てどブタ男が捕まえる

そしていきなり、思いつき殴つた

少年の体は大きく飛び、強く地面に叩き付けられる

ツワーと、少年のこめかみに血が伝う

「よくそんな弱つちい体で賞金稼ぎなんて出来るよな、化け物どもの対したことないんだな」

吐きするように言つて、男はそのまま大金を手に家へ戻る

これは、虐待と言う行為ではないだろつか

でももしこれが虐待だつたら、これほど非道い虐待は無いだろう  
子供に危ない仕事をさせて大金を稼がせ、そして殴る

人間は、これほどまでに汚い姿になれるんだと、初めて知った

「ゲホゲホッ……痛つ……」

数分後、男が完全に立ち去つた事を確認し、少年はヨロヨロと立ち上がる

こめかみを流れる血はどんどん酷いものになり、次第に血まで吐き出す

「お、おい大丈夫か?」

思わず駆け寄ると、少年は驚いたようだ、体を強ばらせて仰け反る赤い目

少年が初めてこちらをみて、此方も驚いた

この少年は、多分自分の師匠だ

髪の色も目の中も同じ、顔立ちもあの顔を子供にするところな感じになつていただろう

にしても可愛い顔だ、コレがアレだとは信じがたい……

「お兄さん誰?」

そう言われ、改めて少年の存在を思い出す、それにしても師匠にお兄さんて……

やはり大人バージョンと子供バージョンの大きなギャップに驚く

「えーと、通りすがりの旅人。君、酷い怪我だけど大丈夫?」

こういいうのはみつちり師匠に教え込まれたから心配はない

俺の説明に納得したのか、質問へと思考を走らせる少年

「大丈夫です、それにしてもこんなご時世に旅とは珍しいですね」

ニッコリ微笑まれ、逆に質問される、まさかこう返されるとは……

それよりこんなご時世つて?

「ああ、ちょっと大切な目的があつてね」

勿論答えも教えられているから大丈夫、だがこう聞いてくる奴はかなり手強いと聞いた

「そうなんですか、では俺はこれで失礼します」

さつさと切り上げて立ち去る少年、こんなところはそつくりだ  
まあ今はそんな悠長に語つてる場合じやない、少年の手を掴み止め  
ると、怪訝そうな顔をされる  
あ、こんなところもそつくり

「い、ごめん、俺今日宿探してんだけど、泊めてくれない？」  
ああ、俺だつたらこんな強引な旅人いたら殴るぜ  
だがどうやらこの少年は違つたらしい、少しため息を付き、付いて  
きてくださいと叫つた

やつぱりあの大きな家に入るのかなと思ったが、そうでは無かつた  
あそこから暫く歩き、薄暗い路地裏に入つてそこにある小さな家に入つた

着いた灰色の小さな家には、小さな電気とソファーと毛布、そして  
水道と窓だけの殺風景な部屋が一つと狭い書斎が一つ

「悪いけど此処で寝てください」

そう言われソウナーを見せられる、見たところこの少年が普段寝る  
場所も此処らしいのだが

「良いよ俺は、屋根と毛布があれば十分」

やんわり断ると、追い出しますよ?と脅された  
嫌なところは同じだ

人の優しさなんだと思つてんだこいつは……

「僕はまだ寝ません、食事は遅いですから」

バタンと大きな音がしてドアが閉められる、そして俺は一人残された  
何か途轍もなく切ないんですけど、悲しいんですけど  
やっぱり元からアレか、子供時代からひん曲がつているのかあの人は  
小さくため息を付いて頭を冷やすと、でも子供時代はまだまだ良い

方だなと思い直す

寝床もくれたし食事も用意してくれるっぽいし

だが気になるのはやっぱり生活だ、男に殴られ、そして多分危険な仕事をしている

「何での馬鹿強くてプライドの高い師匠があんなブタに黙つて殴られてるんだろう」

少なくとも自分の知っている人は、殴られたらその三倍返す様な悪魔だ

その悪魔も子供時代は少しは大人しかったようだが、やはり俺が殴つたら一倍にして返すだろうと推定される

そしてこの人生の終わりはもう近い

俺は見習いでも一応大体の死神の能力は会得している

だから直感で分かる、命の終わりが

死神と成る者は大きな罪を犯した者だ

お前はどんな罪を犯した、死滅への道を辿る者、ヴィル・ワイン

俺の犯した罪は自殺だった

話によれば、俺は元々その次元に居るべき存在じゃなかつたつまり、異質な存在だ

姿形は同じでも、そこに在るべきものでは無いもの  
いすれ体は異質の魂を支えきれなくなり、壊れる  
俺の場合は、先に壊れたのは体ではなく精神だった

俺は死んで、体という枷から解かれた

そして俺は大きな風の塊となつて、人を殺した

無意識に、ただ悲しみという感情のままに

異質の魂は世界にとつては驚異だ

俺が腕を一回振るえば竜巻が起きて人を襲う

俺が少し地面を殴れば地震が起きる

俺はあのとき、化け物だった

それを助けてくれたのが、師匠だ

師匠は俺を死者の国に連れて行き、助けた

本当は大罪を犯した罪で永遠の苦しみを味わう筈だった俺を  
自分の監視の元、死滅までの全てをともに生き、そして異質の魂を  
刈ると契約の元で

師匠の罪は何だったのか？

何故俺を助けたのか？

それにこの記憶は深く関わっている気がする  
見たところ師匠の魂もここでは異質なものらしいが、自殺しそうに  
は見えない

では何故死ぬ？何の罪を犯したんだ？

「おーいソウルー」

大きな野太い声が聞こえた

ソウル、多分それは師匠の前の名前だろう

「ギル？何か用」

短い返事をして出ていくソウル

この様子だとソウルと野太い声の男は知り合いだろう

良い方の

ドカドカと上がってきたのは声の通り大柄で目つきの悪い熊のよう  
な男

うつわーー！このツーショットまったく似合わねえーーー！

「ん？何だこいつ、ソウルの知り合いか？」

「ああ、こいつね、怪しい旅人だよ」

怪しげって、こいつ俺のこと絶対信用してねえ  
ふーんとつまらなそうに言う熊男

「で、何のようなの？ギル」

さつさと言つてよと促すソウル、その姿は年齢相応だつた  
「実はまた依頼が入つたんだ、レディとアルフ両方に」  
またかと嫌そうに溜息をつき波面すると、ギルが苦笑する  
「でつかい竜五匹、あとその他多數」

そこでやつと話がわかつた、これは金稼ぎの話だつたんだ  
そしてこの、ギルという男は相棒で、一人で依頼を受けているんだ  
まったくこんな小さい子供にこんな危ない仕事をさせていたのかと改  
めて腹が立つ

「ふーん、あ、ちょっと外して」

そう言われ、俺は部屋を追い出された  
そして話が終わる夜中まで、俺は一人悲しく一人で待つていた  
「ごめんね、もう入つてきて良いよ」

二ツコリと上機嫌で微笑まれ、少し吃驚する  
やはり知人との会話は楽しかつたのだろうが、あの悪魔でもこんな  
風に笑えるのだ  
改めて自分が信用されていないと氣づき、少しガッカリする  
やはりどんな人物でも師匠は師匠、恩人は恩人だ  
それになぜか俺はあの人と居るのが気に入つてゐるから、やはり好  
んでもらいたいものだ

朝日が差し込み、頬を照らす

「ねえヴィル」

自分が呼ばれ、何だと見てみると少年が一人  
「……、お前何で俺の名前知つているだ」

そういうと、逆に驚かれる

「あんた本当に、ヴィルって名前なの?」「ヴィル・ワイン」

「そうだよ俺はヴィル・ワインだ、どうして知っている?」

「ちょっと夢で似ている人いたから」

ああ『前触れ』か

こいつ、今日死ぬんだな

『前触れ』は異質の魂に起こる現象だ

俺も実際、見たことがあった

そして、その夢を見た日に自殺した

随分短い間だつたがこのチビ師匠には世話になつた

それが今日で死ぬとわかると少し辛い

「夢の中で、俺とあんたは仲間で死神だつた」

「そうか」

「俺はあんたを助けたんだ、あんたは化け物だつた

「……」

「悲しい、化け物だつた」

「……そうか」

「俺は何だかすごく悲しかつたんだ」

「……?」

「すごく悲しくて、悲しくて、助けたくて仕方なかつた

「

「俺はあんたを助けられた?」

「ああ」

まるで師匠の本当の気持ちを聞けたような感じだつた

師匠が俺のこと、すごく大切の思つていいよつて、嬉しかつた

「……ごめん、俺変だ」

顔を俯けている小さな少年、俺の師匠

「別に良いよ、俺は嬉しかつたから」

そういうて優しく頭を撫でてやると、遠慮がちに抱きつくな

この小さい子供の命は、もう僅かだ

「俺さ、拾われたんだ、あの家の人に」

「うん」

「俺の姿はね、おかしいんだって、この世界では」

「うん」

「俺ね、昔から腕つ節だけは強かつたんだ」

「うん」

「だから賞金稼ぎしてて、毎日毎日怖いんだ」

「うん」

「いつか、死ぬんじゃないかって、思つ

「うん」

「だんだん増えてく罵りの声が怖い」

「うん」

「だんだん無くなつてく、優しい声が怖い」

「うん」

「こいつが俺の周りの全員が俺よりずっと遠くの所へ行って

「うそ

「こいつが、俺の周りの全員が居なくなる気がするんだ」

「うそ

「毎日毎日ずっと恐怖が続く」

「うん」

「毎日毎日ずっと恐怖が続く」

「うそ」

「最近よく見るんだ、独りぼっちで暗い暗い深い所にいる夢」

「うそ」

「誰も居なくて、光さえなくて、ずっと一人ぼっちの夢」

「うそ」

「怖いよ」

「ああ」

「すいへ、怖い」

「もうだよ、なあ

それは俺が知る中での一番の恐怖

一人は怖いよ

死なせたくない、そう思った  
こんなに辛いことばかりで  
小さくて、他の何にもやらない奴らが生きて、何でこいつみたいに  
生きたい奴が生きられないんだ

何で、こいつは死ぬんだよ

何でこいつはこんなに不幸なんだよ

何で、こいつは……

腕の中で小さく泣くこの子供が

何でこんなに過酷な運命を背負わなきゃいけないんだよ

「行って来ます」

「うん」

「ありがと、嬉しかった」

「やうか

「もし俺が生きて戻つてこれら、また俺の愚痴聞いてね」

「……ああ」

「俺が死ぬときは　あんたならわかるよね」

そう最後に微笑んで、光の中へ姿を消した

あいつが死ぬときは

数時間後、俺はこの世界をたつた

それは何を意味するか

暗い中、一人の子供が蹲る

真つ赤な血と大きな怪我

そして最後に仲間の死体

白い髪の子供立ち上がる

最後の一人の仲間の武器を掴む

「さよなら、大ッ嫌いな僕の世界」

ツウーと頬を伝うなま暖かい液体

静かに鎌を首にかけ、何の前触れも無く振り下ろす

自由になつた異質の魂は、悲しみの風を走らせる

そして、静かに天に昇つていく

鎌を首振り下ろし、また一つ魂を刈る

「おい、どうかしたか？何故泣いている」

同僚の声

「え？」

驚いて目尻に手をやると暖かい液体

「ちょっと昔の事思い出しちゃって」

ああ、そつか

「ちよつと昔の事思い出しちゃって」

やつ言つと、熊顔の人のいい同僚は苦笑する

「あんなモン、思い出すようなものじゃないだろ」

自分と同じ世界、少しの間同じ道を歩いた者

「こいつが死神になっていた時は驚いた、彼も異質だったのかと

「確かにね、でも、少し、良い思い出もあるよ」

「そう笑うと、へえどんなの?」と聞かれた

「俺のことを理解してくれる怪しい旅人さんの思い出

【外伝番】記憶と繋がり（後書き）

連載はじめの投票がいきなり外伝版！！  
ここまで読んでくれた人に感謝します  
ついでにコメントくれたら泣いて喜びます

「　　見たか？もつもつとで世界一つぶつ壊しそうになつたつて化け物」

「見た見た、ありや地獄行き決定だな」

「だよな、スゲーゼ千年ぶりだつてよ？地獄行きは

「マジかよ？！そんな化け物よく捕まえられたな

「まあな、捕まえたのは、あのジョイドさんだつて

【始まり】

高橋拓也、中学一年生、部活は帰宅部で成績は上の上、運動能力も上の上

異様なまでの才能を持つたこの少年は、現在は不登校だ

顔は悪くは無く、どちらかといえば良い方、それでこの才能となれば女子は寄つて集る

それを妬む男子と学校に来ずとも成績の良いことを妬む教師十数名

目の前には大勢の人が歩く、そしてジッとそれを眺める俺  
道行く人々はまるで俺が存在しないかのように全く速度をゆるめず  
機械的に歩く

時折チラリと俺を見る者も居るが、それも数秒、結局は他の者と変わらない

時々、俺は自分が何のために生まれたのか疑問に思つ

ただ簡単な授業を聞くため？

それとも馬鹿な女子に騒がれる為？

答えは見つからず、ゆっくりとそして確実に月日は流れる

俺が死んでも良いか？と聞くと、決まって相手はこう答える

「駄目だよ、君はもっと生きなきゃ」

そして最後にこう付け加える

「親御さんも悲しむよ？」

よくこんな説得で自殺を本気で考えている人間を止められると思つ

てこらなど逆に関心する

「」の質問に俺は「」と答える

「親は、俺が小学一年生の時に死にました」

「うーつと、相手は同情するかのよーつて言つ

「辛いのはわかるけど、親御さんも天国できつと想うことを見てい  
るよ」

まるで幼稚園生に言つつかのよーつな台詞だ

「俺の親は、俺を虐待してました、死んだのはそれぞれの不倫相手  
に殺されたからです」

そう言つと、焦つたよーな素振りを見せせる

「でも、君だつて本当は生きたいでしょー?」

「全然」

はつきり即答してやると、今度は怒る

「君、私をおちよくつて楽しい?嘘くそことばっかり言つて、人の  
の優しさをなんだと思つているんだ?」

嘘臭い、決まつてそう言つて俺は追い出される

優しさなんて知らない、どうせ情けでやつてているだけだから

どうせ自分に余裕があつて、自分がすごいと思っているからこんなカウンセリング何て仕事をするんだ

みんな自分では対応しきれない重荷があつたら、捨ててしまいたいと思うでしょ？

俺はただの重荷だ

学校へ行くと、まず冷たい視線が飛んでくる

そして小さな憧れの眼差し

まだ破棄されていない自分の席

それが今ではただ一つの居場所だと思つ

鞄を置いて、イスに座り机に頬杖をつく

周りからはチラチラと色々な視線を感じる

妬み、憧れ、そして異質者を見る様な目

そこで俺は改めて自分が此処に居るべき存在じゃないんだと認識する

授業が始まり、つまらな担任の説明が耳に入る

時々ギロッと睨む様な嫌な目つきで俺を見ては、授業を続ける

まるで居てはいけない者 のようだ

難しいいらしゃまあまあ簡単な問題を指され、暗算で答えを出す

答えをいつと舌打ちをするように正解だと言われた

それから授業は続き、そしていつの間にか下校の時間になる

部活へと慌ただしく走る生徒、生徒

自分と同じ年代の人間だとは思えない生き物たちだ

一人ゆつくり廊下を歩き、電車に乗り、アパートに着く

そして読書を始め、風呂に入り寝た

毎日毎日が退屈だ

つまらない、人と会いたくない

気がつくと、俺は真夜中の廃墟のビルに居た

冷たい風が俺の髪を揺らす

フェンスはもうボロボロで、所々穴があつて入るのは簡単だった

足をかけてじょっと身を屈める

そして高ニビルの縁に着く

後は、後一歩踏み出せば良い

そして衝突時の一瞬の痛みに堪えれば、もう終わりだ

感情なんて元々なかつた口ボットのようにならひよ

俺はその一歩、踏み出した

気がつくと真っ暗な世界に居た

感情が勝手に動き、そして俺は風を纏う

冷たい風は興奮した体を冷やしてくれた

俺は腕を力強く振り、大きな竜巻を起こした

自分の感情を乗せて

俺は廃墟のビルに居た

そこがいつも俺の休み場だから

汚い屋上と錆びてボロボロのフェンス

その世界が、気に入っていた

「おしゃれの」

のんびりした声

まさか自分にでは無いだろうと思いつつも、振り返る

見えたのは美しい男

動きやすそうな黒を象徴とした服に、大きな鎌

「そーそーお前だよ、つーかもつの世界にはお前以外殆ど居ない  
しな」

陽気に喋り出す男

正直戸惑った

話しかけられた事なんて、一回も無かつたから

「お前、自分のしたことわかるよなあ？」

ドスのきいた声、低くて、さつきまでの喋り方とは全然違う、別人だ

すごい寒気が襲う

いつの間にか近くにいる男

動かない体

「わかるよな、お前はこの世界を壊したんだ」

睨まれ、思わず怯む

怖い

「これは大罪なんだよ」

「自殺、そして世界への干渉、ついでこれは世界を破壊してつナゾ」

変わらない声の冷たさ

「お前は、罪を償わなきゃいけない」

「着いてこ」

嫌だ

直感的にそう思った

いやだ嫌だイヤだ

俺は激しく暴れた

竜巻、大風、炎、水

激しく抵抗するが、その攻撃は全てかわされる

グラッ

体が揺れ、景色が歪む

何だ……？

「力の使いすぎだ」

薄れゆく意識の中、最後に見たのは男の悲しそうな顔だった

目を開けるとぼやけた灰色の空が見えた

ブチッ

体を起しきれると激しい頭痛が襲う

「う…………」

「起きたか」

背後から声をかけられた

そして視界にあの男の顔が『』る

逃げようとした起きあがれてしまうが、手が動かない

「悪いな、ちょっと縛らせてもらつた、暴れられるのは困るんでな

男は苦笑しながらそつと腰を下ろす

「まあ何だ？ ゆっくり話すついでじゃないか」

お前も、理由が分からぬまま辛い目に遭うのは嫌だらう

そう感想、やうだらうへども面つまつこいつを見る

少しその動言に戸惑つたが、知らんぷりをして落ち着く

いつこう風に話しかけられるのは初めてだつたから

男は俺が大人しくなつたのを確認して満足そうに微笑む

「まあお前にについての説明をしようか」

訪ねる文だらうがこの言い方とこの男の性格を考えると「結構だ」と断つても気にせず続けるだらうから俺は軽くうなづくだけにした

予想通り男は俺に目もくれず勝手に喋り出した

「これから俺が話す話はお前の知識じゃ到底かなわないものだ、あまり深く考えずにただ変なオッサンの空想話を聞くようにして聞け」

どうせ今度も反応してもしなくても変わらないだろうと思っていたが驚いたことに男は俺を見つめていた

慌てて頷くと少し苦笑された

男は側に置いていた大鎌の刃に軽く自分の指を滑らせる

すると指は切れ、血が流れた

男はそれを確認させ、立ち上がり大鎌で俺を切った

「目、開けても大丈夫だ」

咄嗟に堅く閉じた瞼のことを指摘され、パニック状態から戻る

目を開けてまず感じた違和感は痛みが無い事

「わ

鎌が振り下ろされた首を見ると、思わず上げてしまつた間抜けた声

鎌は確かに俺の首を通つている

だが、切れではない

今も俺の首に刺さっている

鎌が実際に触っている部分はまるで水のよう�탑タップタップと揺れていた

「お前昔から怪我の治り早かつただろ」

そういうきなり指摘され、確かにそうだと想い出す

「ちなみに言うと怪我自体変だった、想像したくもない様な大きな怪我を負う筈なのに何故か軽傷だったり、怪我している筈なのに何故かしていなかつたり」

確かに、やつだった

「想像出来ないだろ、自分の首が大鎌で切られる所は」

「実際には想像したくないんだけど……、と小声で付け足すし鎌を俺の首から引く

「怪我をする、と言つことはその世界に干渉していることでもあるんだよ、だからこの世界に干渉できない俺達には本物の怪我が出来ない」

「じゃあ俺のする怪我って何だ?」

「実はその答えは今のお前とひつつきの俺の言葉にある……、めんど一何で教えるが『想像』だ」

頬杖をつき男は面倒臭そつと言つ

「お前の今までの怪我は全て大雑把に言えば“幻”、お前が想像した怪我だったんだ」

「つこでに言つとお前も大雑把に言つと“幻”だ

「感じなかつたか？生きている時、自分が“あまりにこの世界で浮いていいる”と」

「周りに、世界に“適応”できない自分、存在しているのに存在していないと同じ」

「幻じやなく、存在したいと思つただろ、お前」

「体はいわば幻をかける術者」

「その術者を殺せば存在できる」

「自殺は唯一術者だけを殺せる方法なんだ」

「幻は解け、お前は存在した」

「だが幻でなければいけない言つ」とは、俺達がこの世界に存在してはいけないということなんだ

「だから大罪なんだ、自殺といつ行為は、存在してはいけないものが存在してしまうから」

悲しい目

それは今まで見てきた同情の目じゃない

自分が悲しい時の目だ

本当に初めてだ

こんなに『優しく』されるのは

こんなに自分が『辛かった』って思い知られるのは

「俺は、どうして“幻”なんだよ？」

情けない

子供の様な小さくて弱々しい声だ

「この世界に居るべきではない魂、いわば異形の魂を持った者だか  
ら」

魂

ああ、だから

だから、俺が異形のモノだから、この世界は優しくなかつたんだ

居てはいけないものだから

みんな冷たかつた、みんなと打ち解けられなかつたんだ

でも

「別に好きで異形のモノになつた訳じゃない、よな」

言いたかつた言葉を、先に言われた

勿論言つたのは田の前の男だつた

「好きでこの魂持つてる訳でもない、好きで此処に生まれた訳でもない」

「好きでなつた訳じやないんだから、優しくしてくれてもいいじゃ  
ないか、つて」

「わづ、思つちまつよなあ……」

へラつと、綺麗に咲いた困つたよつた笑顔

笑つてゐるけど悲しそうな、見でいる方が悲しくなる様な笑顔

目尻が焼けるよつに熱くなつた

多分初めての涙

生きてゐる内には流せられなかつた涙

ああ、辛い

この人も辛かつたんだろうなあ、きっと

かうへ辛くて悲しくて惨めでしうがなくて

我慢できないう位辛くて

それで死んじやつたんだろうなあ

何となく、この人も俺と同じなんだと思った

良かつた

「あなたには失礼かもしれないけど……良かつた……」

止めなく溢れる涙

その涙は、全然止まりそうにない

「一人じやなくて……良かつた……、他にも……遠くても……  
俺と同じ思いしてる人が居てよかつた……」

ほんとつ、良かつた

いつも思つてた

もしかして、この世界の中でこんなに辛い思いをしてこるのは俺だけじゃないかつて

いつも思つて自分が、辛くて、嫌いだった

子供の頃見てた教育番組のアニメ、そこにどんな辛い思いをしている子達が居た

そのアニメの子達が羨ましかった

それでもその子達は、ちゃんと胸を張つて、みんなで生きていくんだ

ちゃんと同じ思いをしている子がいるから、他の子達と一緒にいると会って、そして生きていたから

ちょく幸せやうで、羨ましかつた

俺にもいつか、そんな仲間ができるって信じてた

そんな仲間に会つたまこと、頑張つて生きよつて思つてた

でも、頑張つて生きても、誰も気が付いてくれない

何故か、どんなに頑張つても、もっと深い闇の中へ落ちてこくなつて

気がした

頑張つて頑張つて、生きて生きて、落ちて落ちて

限界が来るまで、生きてきた

限界がくる前に、仲間と会えるって信じた

そしてきっと、仲間が俺を闇から救ってくれるって信じた

でも、仲間と会つ前に、限界が来た

ああ

「生きている間に、あなたに会いたかった」

ブウオン

大きな風が吹く

わざと回じように、急に眩暈がした

「お前つ…………何で…………！」

ぼやけた視界に、黒い死神が見えた

体が重い

頭が痛い

此処は何処だ？

「起きる

言われなくとも起きてるよ

そう言い返したかったが、声が出なかつた

はやくしろ、大声で怒鳴られた挙げ句頭を蹴られた

痛い

無理矢理体を立たせられ、グラリと全身が傾く

やつと見えてきた映像が、逆に頭を混乱させた

「…………此処、何処だ……！――！」

手足に重い鎖

両側には知らない大人の男性

まるで裁判をするような部屋に居た

「此処で、お前は裁かれる、まあ多分地獄行きだけどな」

小さく嘲笑う様な口調で言つ左側の男

右側の男は、深くマントを被っているので顔が見えない

引きずられるように前に歩き出す

着いた先には何千人もの人々が居た

その中の中心に居る人物達が、俺に話しかける

「貴方は昨日、死神ナンバー27ジェイド・ワインクスによつて捕獲されました」

ちなみにジョイドつてのは俺ね、と左側の男が言つ

「自殺、そして世界への干渉、この二つが貴方の罪です」

ああ、言つてたなあの人も

そつ思つてゐると、またジョイドといつ男が話しかけてくる

「あれはもう破壊だつたけどなあ、ギリギリでシドの奴が止めたから干渉つてだけになつたんだぜ？良かつたなあ」

シド？止めた？

あの人シグつて言つのか……

「シグつて人、どうして「五月蠅い、少しは黙つてろ」

俺の質問を遮つたのは右側の男だつた

「五月蠅いだつて、相変わらず堅いねえもつちよつと氣楽に「お前もだ、場所くらいわきまえのよ、馬鹿」

なんだよ連れねえなあと、小さく呟き、左側の男は黙る

右側の男はその声を無視して変わらず前を見ている

「この人、あの人に似てる……」

「ちゃんとした話位聞け」

また右側の人の注意が入る

心中の中ではーーと返事をして、改めて正面に向き直る

「結論として、この者を『地獄』へ連れて行くと決まりました」

随分話しひんなどな……

呆れたように言つたジョイードの言葉に同意しながらも、内心かなれ  
焦つた

「すみません、もう一度検討してもらえませんか」

言いたかつた言葉を言つたのは右側の男の人、やつぱり似てる

少しざわついた人達を全く気にせず、右側の男の人は続ける

「だが、この者は大罪を犯した、今までにないくらい大きな」

「そう言われそうか、俺はそんなに酷いことをしたのかと、今更ながら後悔した

「俺は一億の魂を刈りました、確かに朝廷の決まりで一億の魂を再生させた者には一つだけ願いを聞くという決まりがありましたよね？」

「確かにあつたな、よく知ってる」

不思議な空氣だつた、誰一人、口を利かない

「どーも、じゃあ俺の願いを聞いてください、此奴を無罪放免にしてください、俺がこいつを監視します、期間は、こいつが死滅する瞬間まで」

「おまえ何言つてんだツツ……」

「何つて、俺がこいつ死ぬまでずっと見ててやるから地獄に行かせるなって言つてるんだよ」

「それは分かつてる……どうしてお前がそんな事するんだよッ……」

「こいつ氣に入ったから」

猛烈な勢いで喧嘩し始めた二人、騒がしくなる人々

「……まあ、あなたの頼みでしたら良いでしょう、ではその子、よろしくお願ひします」

ええーーーっ！――

俺の右側に居た人以外、みんなそう言った

勿論おれもだ

こんなに簡単に地獄行き訂正されるのかよ……？

「来い」

終わった途端に手を引っ張られ、その部屋から出された

勿論ひつぱつたのは右側にいた人だ

後ろでジョインの騒ぎ声が聞こえたが、あえて無視した

「まあ、つー訳でお前は俺の部下になつた

唐突な切り出しだなと呆れるが、不思議と笑いが込み上げてくる

「あんた誰ですか?」

「は?」

「だから誰ですか?」

前語撤回、俺も唐突だ

「あー俺だよ」

わざわざまどとは打つて変わって優しいと言つた氣楽な口調になつた

そして深く被っていたマントを脱ぐ

「覚えてるよな

「勿論

現れたのは青灰色に似た髪の毛と赤い目

あの人だ

「はい、じゃあこれからよろしく、俺はシグ・ウインだ」

自然と零れた笑みに、また笑う

「 ゆりじくお願こしあわ 」

オマケ

「 あーこれでやっと心置きなく殴れる、テメエよくも俺のことにオッサンって言ったなつ！！！」

「 いで！ てあればアンタが自分で変なオッサンって言ったんじゃないカッ！ ！」

「 あればジョークだジョークつ！ それくらい分かれ馬鹿！ ！」

「わからんねえよ、普通にあのタイミングで[冗談とかな]から……」  
「かあんた性格変わりすぎ……！」

「ケツ……」それが本性だ、何だ優しいとでも思つたか……  
「うわー最悪だ」……

## 過去（後書き）

すみません、最後ぶつ飛んでしまって

ほんとすみません！…本当はもっと感動だったんですけど…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3917d/>

---

死神

2011年1月12日03時58分発行